

はじめに

—筆者らがCEFRと出会ってから本書を執筆するまで—

2001年にCEFRが公開された当時、筆者らにはまだ面識はなく、それぞれの教育現場で、それぞれにCEFRを手にとっていました。CEFRを手にしたきっかけや動機、そのとき抱えていた問題意識は両者異なっていたものの、CEFRを参照した実践を試みていく中で出会いの機会があり、互いの教育実践に興味を持つようになりました。そのうち、CEFRを参照した実践を通して、CEFRの教育現場への文脈化に関心を持つ国や機関を越えた多くの教師たちと知り合い、思いや悩みを共有し、協働活動が生まれ、その成果の一つとして2016年に『日本語教師のためのCEFR』（奥村・櫻井・鈴木 編著、くろしお出版）を出版いたしました。

その後、筆者らはそれぞれの教育現場で言語教育と向き合いながら、CEFRで最も重要な言語活動と位置づけられた「仲介」をどのように理解し、教室活動に結び付けていくのか、試行錯誤を繰り返していました。2018年にCEFR-CVの試行版が公開されると、早速、更新された「仲介」の箇所を各々で読み始めました。ですが、抽象的な記述も多く、理解はしたものの、その理解が本当に正しいのかどうか自信が持てずにいました。そんな折、たまたま互いにCEFR-CVの理解に苦しんでいることを知り、一緒にCEFR-CVの全文を読むことにしました。分担して翻訳し、月に一度、内容と解釈を確認しながら意見交換を重ね、1年間をかけてゆっくりと読み進めていきました。まずはCEFR-CVとCEFRとの関係性を理解することから始め、必要に応じてCEFR-CVの背景となる論文も参照しながら行われたこの作業は、日常の業務から離れた楽しい時間でもありました。

その作業がひと段落した頃、「欧州日本語教育研修会」（国際交流基金パリ日本文化会館主催）において、2020年には「Mediation（仲介）から考える日本語教育実践」というテーマで櫻井が、2021年には「CEFR Companion Volume（CEFR-CV）って何？」というテーマで奥村が講師を務めることになりました。これらの研修会は、自分たちの理解を再考する良い機会となり、これと並行して、筆者らの協働活動から得た知見を整理して論文等の執筆にも取り組みました。

本書は、筆者らがCEFR-CVを読んで考えたことを、広く、多くの人と共有したいという願いから執筆しました。本書を通じて、言語教育に関する対話の輪が広がっていけば幸いです。また、本書の出版に向けて、きめ細かいサポートとアドバイスをくださったくろしお出版の池上達昭さんに心からお礼申し上げます。

櫻井直子・奥村三菜子

目次

はじめに	3
〈この本を読む前に〉	7
第1章 CEFR-CVの基盤となる考え方	13
1 CEFR-CV出版の背景	13
2 複言語・複文化主義	17
3 複言語・複文化能力	18
4 社会的行為者と言語活動	23
5 言語教育の目標	25
6 行動志向のアプローチ	26
7 授業で用いる教授法	28
8 評価	30
第2章 CEFR-CV全体に関わる共通の更新ポイント	35
1 カテゴリーとスケールの構成の可視化(ポイント①)	37
2 スケール作成上の考え方の明確化(ポイント②)	43
3 Pre-A1レベルと年少者に関する記述の追加(ポイント③)	48
4 A1レベル・Cレベルの精緻化(ポイント④)	53
5 多様な言語使用者に向けた多目的化(ポイント⑤)	56
第3章 【コミュニケーション言語活動】【コミュニケーション言語能力】 で更新されたこと	59
1 今どきの言語活動を描いたOnline系カテゴリー	60
2 楽しむ言語活動を描いた【読む理解】のスケール	65
3 大幅に更新された〈音韻の制御〉のスケール	68

4 満を持して登場した【複言語・複文化能力】 カテゴリーと スケール	71
第4章 「手話」について更新されたこと	77
1 CEFR-CV で「手話」が大きく取り上げられた背景	77
2 手話言語の特徴および音声言語との共通点・相違点	79
3 記述文の更新とスケールの追加	80
第5章 「仲介」について更新されたこと	91
1 CEFR (2001) における仲介	91
2 CEFR-CV (2020) における仲介	92
3 仲介活動	94
4 仲介の方略	103
5 仲介者の姿	105
6 「仲介」の背景にある考え方	107
第6章 CEFR-CV を参照した七つのアイデア	113
1 CEFR-CV を参照した実践の見直し	113
2 CEFR-CV を参照して得られた新たな知見	119
CEFR-CV スケールリスト	133
おわりに	143
文献	145
索引	147

CEFR-CV の 基盤となる考え方

1 CEFR-CV 出版の背景

CEFR-CV は、欧州評議会が 2018 年に公開し、2020 年に出版した *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment - Companion volume* の略称です。このタイトルから分かるように CEFR-CV は 2001 年に欧州評議会が出版・公開した CEFR (*Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*) と密接な関係を持っています。末尾の Companion volume に注目してみましょう。日本語では「補遺版」と訳されることが多いようです。補遺版とは、刊行済みの著作に説明を補足したり、古くなった情報を更新したりした別冊を指し、初版に修正を加えて改良した改訂版とは異なります。つまり、補遺版 CEFR-CV は、2001 年公開の CEFR では十分に説明されていなかった箇所の補足や、時代の変化などに伴う新しい情報を追加・更新したものとと言えます。

補遺版 CEFR-CV の特徴は、「この出版物は CEFR 2001 年を更新したもので、概念的な枠組みはそのまま踏襲されている (This publication updates the CEFR 2001, the conceptual framework of which remains valid.)」と中表紙に明記されていることから分かるように、CEFR の根幹となる概念的な枠組みは、CEFR-CV にもそのまま踏襲されているという点です。言い換え

CEFR-CV 全体に関わる 共通の更新ポイント

2001年に公開されたCEFRは、言語教育の関係者によってさまざまな実践に参照され¹、それと同時にさまざまな疑問や要望が寄せられました。そうした声に応えるために、CEFR-CVではいくつもの加筆や更新が行われています。これらの加筆・更新では第1章で述べたように2001年のCEFRの考え方が踏襲されており、CEFR（CEFR: 7-8）で示された以下の六つの性格も同様に重視されています。

- 多目的（multi-purpose）
- 柔軟（flexible）
- オープン（open）
- 動的（dynamic）
- ユーザーフレンドリー（user-friendly）
- 非教条的（non-dogmatic）

CEFR-CVで加筆・更新された点については、CEFR-CVの表1（CEFR-CV: 23）に2001年のCEFRとの対応表が、また、表2（CEFR-CV: 24-25）に記述文の変更点の要約が掲載されています。これらを簡潔にまとめたのが以下の5点で、CEFR-CVの第1章に箇条書きで記されています。

1 欧州でのCEFRの受け入れられ方と実践の流れについては櫻井（2021）を参照。

第3章

【コミュニケーション言語活動】 【コミュニケーション言語能力】 で更新されたこと

第3章から第5章では、カテゴリ別に更新された内容を整理しています。まず、本章では、【コミュニケーション言語活動】と【コミュニケーション言語能力】がどのように更新されたか見ていきます。

更新された点は以下の4点です。では、具体例とともに見てみましょう。

【コミュニケーション言語活動】

1. 今どきの言語活動を描いた Online 系カテゴリー
2. 楽しむ言語活動を描いた【読む理解】のスケール

【コミュニケーション言語能力】

3. 大幅に更新された〈音韻の制御〉のスケール
4. 満を持して登場した【複言語・複文化能力】カテゴリーとスケール

「手話」について 更新されたこと

本章では、インクルーシブ教育も視野に入れた CEFR-CV で、「手話」がどのように更新されたかを見ていきましょう。まず「手話」が取り上げられた背景を示した上で、更新された内容を整理していきます。

1

CEFR-CV で「手話」が大きく取り上げられた背景

CEFR-CV は、社会的行為者がいっそう多様化している社会変化の現状の中、インクルーシブ教育により貢献できるよう、あらゆる言語使用者／学習者を包摂したフレームワークの作成を目指しています。すべての言語使用者が社会参加できることを願うこの視点は、2001年の CEFR から踏襲されており、例えば CEFR には次のような記載が見られます。

(テキストやメディアによるさまざまな言語活動が) 学習困難や感覚／運動障害を持つ人々が外国語を学んだり使用したりすることを妨げるものであってはならない。[...] 適切な方法と方略の使用は、学習困難を持つ若者たちに価値とやりがいのある外国語学習という目的の達成と目覚ましい成果を上げることを可能にしてきた。また、読唇術、残存聴力の活用、発話訓練は、重度聴覚障害者に第二言語習得や

「仲介」について 更新されたこと

本章では CEFR-CV で大幅に更新された「仲介」を見ていきます。まず、「仲介」に関する CEFR の記述から「仲介」の更新の背景を探り、CEFR-CV における「仲介」の考え方、仲介活動、仲介の方略を整理します。その上で、仲介者の具体的な姿を描き出すことを試み、最後に CEFR-CV における「仲介」の概念を、その他の言語活動との関係および四つの種類の仲介から考えていきます。

1

CEFR（2001）における仲介

CEFR は、言語活動を、従来の話す、聞く、書く、読むという「4 技能」ではなく、産出、受容、相互行為、仲介という四つのカテゴリーで示し、「仲介」を独立した活動と見なしています。その上で、CEFR は以下のように仲介を、社会で課題達成を行う社会的行為者にとって最も大切な活動であるとしています。

仲介は我々の社会での通常の言語機能において重要な位置を占めている。
(CEFR: 14)

また、仲介活動は意志疎通ができない二者間を取り持つために、テキス

CEFR-CV を参照した 七つのアイデア

教育実践を行っているとき、日々いろいろな疑問が湧いてきます。そんな疑問を解消するためのヒントが CEFR や CEFR-CV の中に見つけられるかもしれません。特に CEFR-CV ではスケールが増えたので、これまでよりもさらに参照できる幅が広がりました。筆者らは、CEFR-CV で新しく更新されたスケールを教育実践にどのように参照できるかを考えてみました。本章では、筆者らが考えた七つのアイデアを、「実践の見直し」と「新たな知見の獲得」の二つに分けて紹介します。

1

CEFR-CV を参照した実践の見直し

アイデア①：ディスカッション活動における教師の支援を振り返る

〈実践での疑問〉

日本人大学生と海外で日本語を学んでいる大学生との異文化間交流のイベントを定期的に行っている。このイベントでは、社会的なテーマについてグループ・ディスカッションを行っているが、両者のコミュニケーションがぎこちないと感じることがよくある。自分は教師としてどのような支援を行ったらいいだろうか。